

堀河百首題「網代」をめぐって

内藤 愛子

1

堀河百首題の四季題のうち、「堀河百首」成立以前に歌題としてあまり取り上げていない歌題を多く含んでいる。その冬部の歌題うち「初冬」「寒声」「網代」「神楽」「鷹狩」「炭窯」「埋火」は「堀河百首」成立以前に歌題としてあまり取り上げていない歌題と指摘されている。¹⁾ 冬の歌題あまり取り上げていない歌題の特質や詠法の特徴を分析することによって堀河百首題の特質を捉えてみたい。今回は、冬の部の歌題である「網代」を取り上げ、「堀河百首」詠出歌人達がどのようにその歌題を捉え、表現しているかを個々の作品にそって和歌表現を具体的に分析し、堀河百首題「網代」の特質を明確にしてみたい。

まず、「堀河百首」以前において、網代がどのように詠まれていたか見てみよう。「網代」は『万葉集』より詠まれている。管見の範囲では三首(266・1139・1141)みえ、そのうちの266の詠歌は

もののみややそ宇治川の網代木にいざよふ浪のゆくへしらずもとあり、宇治川の網代を詠じている。

また、堀河百首題と共通の主題が多く指摘されている『和漢朗詠集』において「網代」は主題として見られない。だが、同様に共通

の主題が多数見出される『古今和歌六帖』では、第三帖「あじろ」という主題に七首(1645・1646・1647・1648・1649・1650・1651)あり、その七首のうち五首(1647・1648・1649・1650・1651)は紀貫之の詠歌である。しかも、そのうちの二首は屏風歌である。

次に、勅撰集を見てみよう。「堀河百首」成立以前において歌題としてみられず、「網代」歌題として初出は『金葉集』の冬の部であり、勅撰集において歌題とされるのは「堀河百首」成立以降である。だが、単独の歌題としてではなく、屏風歌の画題の一つとしては『拾遺集』に二首見られ、それらはいずれも障子歌、屏風歌であり、しかも、それらは第四巻の冬に一首(216)、第十七巻の雑秋一首(362)に配されている。

寛和二年清涼殿の御障子に、網代描ける所に 詠み人知らず
216 網代木にかけつつ洗唐錦日を経て寄する紅葉なりけり

内裏御屏風に

元輔

362 月影のたなかみ河にきよければ網代にひをのよるも見えけり

このように障子歌や屏風歌は、障子や屏風に描かれている網代の絵によって詠まれ、描かれている画題によって自ずと詠じる世界が限定されてしまう。このことから、『拾遺集』では、配列意識の関

係から、秋、冬の季節の配列が異なつたと推察されるであろう。屏風歌や障子歌の「網代」は画趣との関係から秋季や冬季の歌に判別されることになつたのであろう。このことから『堀河百首』成立以前の勅撰集において「網代」は、屏風や障子絵の画料の一つであり、屏風歌や障子歌との関係の深さが指摘できるであろう。

次に、屏風歌や障子歌における「網代」を見てみよう。殊に、屏風歌や障子歌を数多く詠出している貫之、忠見、順、能宣、元輔等の家集に複数の「網代」の屏風歌や障子歌を見出すことが出来る。それら「網代」の屏風歌や障子歌のほとんどが「十月あじろ」「十一月あじろ」という詞書が記され、その多くが冬の季節に配された画料であることが知られる。

まず、具体的に「紀貫之集」(『私家集大成中古Ⅰ』57)を取り上げてみよう。「網代」の屏風歌や障子歌を管見の範囲で挙げてみると

天慶三年閏七月右衛門督殿屏風の歌に、「十月あじろ」とあり
398 山川をとめてみれば落つもる紅葉のためのあしろなりけり
また、天慶四年三月のうちの御屏風の歌に、「あじろ」とあり

483 山風のいたく吹おろす網代には白波さへそよりまさりける
天慶五年亭子院御屏風の歌の中に

506 吉野よしの、川のあしろのは滝のみなほそ落つもりける
とある。いずれも「網代」の画料の詠歌であり、秋季冬季と言う分別意識は見られない。これらの詠歌から屏風絵が想像でき、まさに、色彩豊かに描かれた白波のかかる網代に落ち積もる紅葉の眺望を詠じている。

次に、「能宣集」(『私家集大成中古Ⅰ』117)には四首の屏風歌に

「網代」が詠まれている。それら四首(91・142・191・235)のうち一首(191)のみが秋に配されている。

十月、あしろにもみちなかれより、たひ、とあまた、ちとまりてみる所

91もみちはのよれるあしろはあかすしてすきにし秋のせきにそありける

十月、いへゐのところあしろあり、もみちおほくなかれよれり
142日をへつ、もみちはよするあしろこそ秋をと、むるせきにはありけれ

うち

191なかれくるひをまつほとのだためなみあしろにあきのひをやまつらん

うちのあしろ

235もみちはの日をへてよれるあしろにはにしきをはしにわたすと
そみる

191の歌は一条太政大臣家の障子絵の一つとして「秋 うち」という詞書が付き、秋の日を詠んでいる。その他の三首は紅葉の詠歌であり、秋を惜しむ情趣を漂わせている。

次に、「元輔集」(『私家集大成中古Ⅰ』113)には「網代」の屏風歌が四首(22・93・122・142)が見られる。それら四首はいずれも冬に配されている歌である。

あしろ

22みつふかきうちのあしろのいはくらによろつよをへむなみもこすらむ

ふゆ たなみのあしろ

93月かけのたなかみかにはきよければあしろのひをのよるもみえ
けり

十月、山かはのほとりにもみちもてあそふ、あしろあり

122ひをへてもみまくほしきはやまかはのもみちのおつるあしろ
なりけり

なりけり

十月、うちのあしろに人くあり

142おしとおもふもみちのおつるあしろきをよりてみるまに日をや
くらさむ

くらさむ

このように、網代に落ちる紅葉や網代の眺望を詠じている。その
うち22の歌はも、の賀の屏風歌ということから祝賀の意を込めた詠
歌に仕上げられている。

以上のように、元輔や能宣の「網代」の屏風歌には秋に配されて
いる屏風歌もあるが、ほとんどが月次としては十月の初冬の画題と
されていたと言える。しかも、網代に落ちる紅葉を詠んだ歌が多く
みえることから晩秋か、初冬の頃の雅趣なのであろう。

このように、屏風歌において「網代」は十月の月次の画料として
捉えられており、晩秋、初冬を意識した画題である。しかも、既に
指摘されているように、堀河百首題「網代」が冬の歌題に定着する
に際して屏風歌、障子歌の影響関係が考えられるであろう。²²

堀河百首題との関係の深さが考えられる初期定数歌において、網
代を詠じた歌としては、好忠の「首祢好忠集」(「私家集大成中古」
105)の九月中に

263網代守る宇治の川瀬は年つもりいくそ月日をかそへきぬらん
とあり、秋の歌として配列されている。だが、順の「源順集」(「私

家集大成中古」95)のあめつちのうた四十八首の冬に

32うちわたしまつ網代木にいとひをの絶てよらねはなそや心う
とあり、冬の歌八首の中に配列されている。このように定数歌にお

いては秋冬季のどちらにも配列されていて、季節の定着は見られない
と言えるであろう。だが、「源順集」には「網代」の屏風歌が二首
(221・235)あり、いずれも月次の屏風歌で「十月あじろ」「あじろ」
となつてゐる。そのうちの221の歌は「右兵衛督た、きみの朝臣、新

しく調する屏風の歌」の月次の配列から十一月と受け取れる。また、

235の歌は屏風歌という明示はないがその詠歌の詞書に十月あじろと

あることから月次の屏風歌と認められるであろう。

221紅葉さへきよるあしろにてにかけて立つ白波はからに錦かも

235あさ氷とくる網代のひをなればよれとあわにそみえわたりける

このように、屏風歌と同様に「源順集」あめつちの歌の配列におい
て「網代」は冬の主題と捉えていたと指摘できるであろう。

以上のことから、あめつちの歌と屏風歌の成立の前後は判明でき
ないが、あめつちの歌で「網代」の詠歌が冬に配列されていたのは少
なからず屏風歌の影響と考えることも可能であろう。

次に、歌合において歌題「網代」をみてみよう。「堀河百首」成
立以前の歌合の歌題とした歌合は管見の範囲において少なく、三歌
合にすぎない。初出の歌合は寛和二年六月十日内裏歌合(「平安朝
歌合大成増補改訂」一88)であろう。この歌合は四季にわたる詠物
題の初出であり、秋の五歌題の中に「網代」が見出される。

左

能宣

27網代木にかけつつ洗ふ唐錦氷魚綜てよする紅葉なりけり

右

惟成

28 水上に滝の白糸見えつるは網代に氷魚のよればなりけり
この歌合において「網代」は秋の歌題として捉えられていたことが知られる。もう一つは長暦二年晩冬権大納言師房歌合（「平安朝歌合大成増補改訂」二125）に十題十番冬の歌題の中に見られる。

左 弁乳母

5 網代にてひをのみ暮らす宇治人は年のよるをぞ歎かざりける
右

6 ひをへつつ散るもみぢ葉もこの里は網代によりてみるぞうれし
き

また、承暦二年十月十九日庚申媒子内親王歌合（「平安朝歌合大成増補改訂」三205）に冬季二題各五番のうち「網代」の歌題がみられる。

歌合において「網代」が寛和二年内裏歌合と長暦二年権大納言師房歌合の間では、秋の歌題から冬の歌題に変化を示している。しかも、その後の歌合において「網代」が冬の歌題とされていることから冬の歌題として変化の様子が伺えるだろう。このように歌合において、「網代」が冬の歌題として変化し定着していく様子が看取されるであろう。それがどの時期か判明は出来ないが少なからず、歌題「網代」は冬の歌題として定着したことが知れるであろう。

以上のことから考えると、「網代」は初期定数歌においては、秋季冬季の主題にあり、歌合においては秋季から冬季の歌題に変化が看取できる。しかも、屏風歌において「網代」の画題の多くが月次屏風で、十月ないし十一月に位置していることから冬の画題として意識されていたと捉えられるであろう。前述のように、堀河百首題「網代」が冬の歌題として定着するのにあたって月次の屏風歌の影

響を無視することはできないであろう。

2

「堀河百首」の詠出歌人達は歌題「網代」をどのように捉え、詠出方法を具体的に検討を加えてみよう。

まず、堀河百首題「網代」二十六首の表現方法を検討してみよう。堀河百首題「網代」は、既に指摘されているように歌枕によった詠歌がよった詠歌が多く見られ、十六首のうち九首を占めている。³⁾ 歌枕としては「田上」（六首）、「あふみの海」（一首）、「うぢ河」（二首）である。「田上」の六首のうち二首のみ「田上川」とあり、いずれも田上川の網代を詠じている。

1027 田上の瀬瀬のあじろに日をへつつわが心さへよするころかな

1028 あじろ木にしきおりかく田上やその山に木の葉ちるらし

1030 田上やそのむらきみにあらなくにまづ網代木をきてぞうらむる

1031 風ふけば田上川のあじろ木にみねの紅葉も日をへてぞよる

1033 氷魚のよるたびにぞ払ふ田上やあじろにかかるあじろ木の布

1034 ゆふだたみ田上川のめぐらにひをもくらす比かな

「田上」は、近江の国の歌枕、今の滋賀県大津市田上町であり、田上川は瀬田川に注ぐ大戸川を指している。「田上」は『万葉集』より詠まれ、「田上」に関連する歌枕としては「田上山」「田上川」等が挙げられる。「堀河百首」成立以前において多くの歌例はみられないが、そのうち「田上」で水に関連する歌としては次の三首を挙げられる。その一首は『曾根好忠集』の定数歌である三百六十首和歌の九月のおわりに

273 田上や瀬田の早瀬に築さしてよるとしなれはうき寝をそする

とあり、田上の早瀬の築で漁を生活の場とした歌である。次の一首は『範永朝臣集』（『私家集大成中古Ⅱ』28）に

34 たなかみの山にあらしやふきぬらんせ、のしら波いろいろかわりゆく

とあり、この二首はいずれも田上の瀬を詠じている。もう一首は、『田上の網代』という詞書のある屏風歌である。それは管見の範圍によれば、『網代』の詠歌で「田上川」が詠まれているのは『元輔集』の93の歌であり、それが初出の歌であろう。この詠歌は『拾遺集』（1133）雑秋に入集されている。

93 月影のたなかみかはにきよければ網代にひをのよるも見えけり
このように、『堀河百首』成立以前には「網代」において「田上」の歌枕によった歌例が少ないことからこれらの影響と捉えることができるであろう。また、『網代』において「田上」の歌枕による詠法は比較的新しいといえるであろう。

また、『田上川』に拠った網代の詠歌は『堀河百首』詠出歌人である仲実や匡房の詠歌を挙げることができる。それらは『万代集』第六巻冬歌に「落葉浮波といふことを」という詞書で仲実朝臣の詠歌として

1368 あじろうつたなかみがわのいわなみもやまおろしふけばもみぢしにけり

とあり、匡房の『江帥集』（『私家集大成中古Ⅱ』51）に「田上山紅葉」と言う詞書に

508 たなかみのさてさしわたすやまのはももみちのにしきあきにけるかな

とあり、『堀河百首』以外にも「田上」による網代の詠歌が見られ

る。また、「田上」が歌枕として注目されていたことは明らかである。だが、歌枕として「田上」が注目されたのは俊頼が田上に居住していたことから、田上に関連した作が数多くあり、俊頼の影響と指摘することも可能であろう。

このことから、「網代」において歌枕「田上」による詠歌が数多く占めていることは『堀河百首』詠出当時に注目された歌枕であり、『網代』において歌枕「田上」による詠作方法が支持されていた傾向が見受けられるであろう。また、『堀河百首』成立以降は網代の詠歌に「田上」の詠歌がみられることから歌枕として定着した様相が看取されるであろう。

次に、「田上」と同じ近江の歌枕として「あふみの海」を詠んだのは匡房の歌（1026）である。

1026 さざ浪やあふみの海にあじろ木に波と共にやひをのよるらむ
「さざ浪」は「あふみの海」の枕詞を用いて、万葉風に仕立て上げ、伝統的な枕詞を用い、「氷魚」「寄る」という掛詞に拠って波のかかる網代の眺望を詠じながら、日が夜になると言う二つの世界を描いているといえるであろう。

次に、「宇治」を取り上げてみよう。「網代」において「宇治」と共が詠まれた例歌は『万葉集』より見られ、その数は多数に及び、伝統的な歌枕といえるであろう。「網代」における「宇治」は前述のとおり、屏風歌の月次の画題に取り上げられ、「網代」の歌枕として定着していると言えるであろう。『堀河百首』の「網代」では「宇治」の歌枕に拠った詠歌は次の二首である。

1035 山風に木の葉ふりしくうち河の網代はひをのよるところかな
1036 神無月宇治のあじろのひをよりも年のよるこそ哀れなりけり

このように、「網代」おける歌枕「宇治」の詠歌は前述のとおり、「紅葉」に視点がおかれ晩秋、初冬を意識した歌が多数を占めていたのと異なり、この二首においては水魚の寄る所である網代として捉え、多少の視点の変化がみられるであろう。基俊の歌(1035)は、水魚寄る所として網代を捉え落葉の宇治川を詠じている。また、永縁の歌(1036)は既に指摘されているように、初句の「神無月」は、『能宣集』326の歌を意識したものと察せられるだろう。しかも、326谷川のあしろさしてかみなつきみやまかくれのみちをするこの詠歌は網代に寄る水魚に、年が寄るを掛けて年をかさねることの哀れさを詠嘆している。

このように、「網代」における「宇治」は伝統的な歌枕を用いながら詠作方法の工夫がなされている。また、「堀河百首」においては、「宇治」より「田上」が注目を集めた歌枕と言えよう。「田上」は、『堀河百首』成立以前にはあまり使用された歌例が見当たらないことから歌枕としては新奇に注目した歌枕と言えるであろう。また、「宇治」は伝統的歌枕を用いながら新しい視点で「網代」を詠じ、詠作方法の工夫が指摘できるであろう。

3

次に、詠作方法をみてみると、縁語や掛詞に拠る技巧を用いた詠歌は堀河百首題「網代」十六首のうち十四首を占めている。そのほとんどは「網代」の縁語として「水魚」「寄る」が詠み込まれている。そのうち、単に「網代」の縁語として「水魚」や「寄る」を詠んだ歌は次の五首である。

1033 水魚のよるたびにぞ払ふ田上やゐぐらにかかるあじろ木の布

1035 山風に木の葉ふりしくうち河の網代はひをのよる所かな

1037 水浪のもらで残るとみえつるはあじろのひをのよるにぞ有ける

1038 ひをのよる川せにみゆる網代木はたつ白浪のうつにや有るらん

1040 ひまもなくしき波かくる網代木をひをのよるとや人のみるらん

この五首はいずれも網代を水魚の寄るところとして捉えている。このように、「網代」としての縁語「水魚」や「寄る」による歌例は前掲の屏風歌や障子歌、定数歌等にみられ、多数の例歌が挙げられる。「水魚」や「寄る」の縁語や掛詞による詠歌は伝統的な技巧のひとつとして捉えられるであろう。

その縁語「水魚」や「寄る」を詠み入れた歌十四首うちの七首(1025・1027・1031・1032・1034・1036・1039)は掛詞として「水魚」に「日」を掛けている。

1025 武士のとしよるをもしらぬかなあじろにひをやかぞへざるらん

1027 田上の瀬瀬のあじろに日をへつつわが心さへよするころかな

1031 風ふけば田上川のあじろ木にみねの紅葉も日をへてぞよる

1032 つかのまにつもるあじろの木の葉にて日をへてよらむ程を知る

かな

1034 ゆふだたみ田上川のあじろ木のおぐらにひをもくらす比かな

1036 神な月宇治のあじろのひをよりも年のよるこそ哀なりけれ

1039 あじろ木に浪のよるよるやどりしてあやしく日をもくらしつる

かな

この七首は「水魚」を掛詞として「日に経る」「日をも暮らす」とし、時間の経過を意識した詠歌に仕上げている。このように「水魚」を「日」に掛ける詠歌は屏風歌や『古今六帖』第三帖に水魚と云う項目にみられ、数多くの例歌を挙げることが出来る。「水魚」に

「日を」をかける掛詞は新しい技巧とは言えないであろう。

次に、縁語「寄る」に「夜」を掛けている詠歌は三首（1026・1029・1039）である。

1026 さざ波やあふみの海にあじろ木に波と共にやひをのよるらむ

1029 かかり火のなからましかばひをのよる網代のほどをいかでしら
まし

1039 あじろ木に浪のよるよるやどりしてあやしく日をもくらしつる
かな

「寄る」に「夜」を掛けた例歌は数多なく、管見の範囲において『元輔集』の屏風歌に一首（93）見出せる。

93 月影の田上川にきよければあしろのひをのよるもみえけり
や「赤染衛門集」（『私家集大成中古Ⅱ』13）に

ひとのもとより、暗きほどにひをおこせたるに
499 あしろ木によるとは聞し物なれと日をくれすとはけふこそはみ
れ

とあり、明らかに「寄る」は縁語であり、「夜」を掛けた詠歌と受けとれ、技巧の一つとして捉えられる。題詠歌としては『大納言経信集』（『私家集大成中古Ⅱ』44）に「月照網代」という題で

154 つき、よみせ、のあしろによるひおはたまもにさゆるこほりな
りけり

とあり、元輔の詠歌（93）の画趣を基とし、「月」と呼応して「寄る」を「夜」に掛け、氷を詠んだ冬の歌に仕上っている。この歌題もまた、この詠歌の画趣から生じた歌題と受け取ることも可能であろう。

このように、掛詞「寄る」に「夜」を掛ける技巧は定着された詠

作方法と言えるであろう。

これら『堀河百首』の三首をみると、1026の歌は、「日」と「夜」を対として捉えて詠じている。1029の歌は「かがり火」から「氷魚」を「火を」を掛けたとも捉えられ、しかも、「かがり火」の關係から「夜」を連想させ、技巧を屈指している歌と言える。「網代」の詠歌で「かがり火」を詠じた例歌がなく、新奇な歌語と言えらるであろう。だが、『堀河百首』の詠出歌人である俊頼の『散木奇歌集』（『私家集大成中古Ⅱ』62）607の歌に「月照網代」とみることをよめる」とあり、

607 あしろには月の光もあるものをなますらをのか、りたくらん
「かがり火」が詠まれていることから『堀河百首』の詠出当時には使用されていたことが知られるであろう。

1039の歌は「よるよる」と音と意味を重ねるといふ技巧によつて重層を持ったものに仕上っている。このように「よるよる」といふ重ねる技巧に拠つた「網代」の詠歌として『古今六帖』の「網代」の項目に

1061 うち川の浪のよるよるをぞ鳴くあじろもるてふ人のつらさに
とあり、この詠歌を参考にしたとも考えられるであろう。

このように、「網代」の詠歌において「寄る」に「夜」の掛詞は定着した技法を歌人達の工夫によつて詠まれている。

次に、縁語の「寄る」に「年寄る」や「心に寄る」に寄せて詠んでいる歌として三首ある。

1025 武士のとしよるをもしらぬかなあじろにひをやかぞへざるらん

1027 田上の瀬瀬のあじろに日をへつつわが心さへよするころかな

1036 神な月宇治のあじろのひをよりも年のよるこそ哀なりけれ

このように、「堀河百首」成立以前において、「寄る」に「年に寄る」に寄せた歌例としては長暦二年晩冬権中納言師房歌合において網代の歌題の詠歌に

5 網代にてひをのみ暮らす宇治人は年のよるをぞ嘆かざりける
とあり、やはりこの詠歌も「水魚」を「日」に掛け、「日」と対するものとして「年」を連想し、網代にて暮らす人の加齢の嘆きを詠んでいる。だが、このように「水魚」の掛詞「日」から同様の発想による詠歌としては『曾根好忠集』に

236 網代守る宇治の川瀬は年つもりいくそ月日をかぞへきぬらん
とあり、二句目が「宇治の川長」となっている伝本もあり、「川長」とした本文に従ったならば、網代の番としてどれほどの月日を経過とその嘆きを詠じている。弁乳母の詠歌はこの好忠の詠歌を基にした発想によると推察できるであろう。また、このようなわが身の詠嘆の歌として「網代」を詠じた歌は『拾遺集』の恋三に

843 数ならぬ身を宇治川の網代木に多くの日をもすぐしつるかな
とあり、「網代」に詠嘆の発想による詠歌が身出せ、発想として定着していたと看取できるであろう。

このように、詠嘆の発想と共に掛詞「寄る」に「年寄る」を掛けた「堀河百首」の二首(1025・1036)も「年寄る」に寄せて詠む発想の基はこれら詠歌に求められたのであろう。また、「年寄る」に寄せる詠法は比較的新しいものと言えるであろう。だが、いずれの詠歌も従来の発想を用いながら、公実の歌(1025)の初句「武士の」は『万葉集』の人麻呂の歌(264)の初句「もののふや」という序詞から「もののふ」を連想したと捉えることは出来ないだろうか。

国信の歌(1027)は「寄る」を「心さへよする」というように心に

寄せるという技巧に拠った例歌としては管見の範囲では『蜻蛉日記』中巻(安和二年八月)に一首見出せるのみで、珍しい技巧による詠歌であり、技巧の探索と受け取れるであろう。

網代木に心をよせてひをふれはあまたのよこそたびねしてけり
以上のように、「堀河百首」における「網代」の詠歌は縁語、掛詞「水魚」や「寄る」による伝統的な技法を用いながら、屏風歌や定数歌に発想や歌語を求めながら、歌人たちの工夫によって新たな詠作方法を作り上げていく姿が看取れる。

次に、縁語や掛詞を用いない詠歌は次の二首(1028・1030)である。
1028 あじろ木にしきおりかく田上やその袖山に木の葉ちるらし

1030 田上やそのむらぎみにあらなくにまづ網代木をきてぞうらむる
このように「網代」の詠歌は縁語、掛詞による詠歌が多数を占めているなかにおいてこの二首は特徴的な詠歌と言えよう。その一首である師頼の歌(1028)に詠まれている「木の葉」は『万葉集』より詠まれ、「紅葉」と共に詠む例が挙げられるが「網代」に読まれた例歌は見当たらない。だが、『堀河百首』の「網代」において三首(1028・1032・1035)見出せる。そのなかの一首は俊頼の詠歌である。
604 つかのまにつもるあじろの木の葉にて日をへてよらむ程を知る
かな

しかも、『散木奇歌集』において、もう一首(606)に「都の人もうできて落葉浮浪といへることをよめる」という詞書に

606 みとせまで人もすさめぬにしき木とみればあしろのこのは也けり
とあり、「木の葉」を「網代」を詠む際に俊頼が好んで詠じたとも考えられるであろう。また、師頼と基俊の歌(1028・1035)は「木の葉」のみでなく、川と山と組み合わせ、散る紅葉を眺望を詠じ、「堀河

百首」詠出歌人達には好まれた歌語と言えるであろう。だが、「堀河百首」以前の「網代」の詠歌には「木の葉」を詠じた例歌が見えないことから、歌語に拠って新しい要素を取り入れた歌であり、しかも、歌語の拡張の一つと捉えることも可能であろう。また、「堀河百首」成立以後に「木の葉」を詠み入れた「網代」の歌があり、これらの歌の影響と考えられるだろう。

頭仲の歌(1030)では「むらぎみ」という網漁業の綱主を詠み、俗語を歌語として、大衆の場に身を置いて詠んだ生活感溢れる歌に仕上げている。

このことから考えると、この二首は縁語、掛詞「水魚」や「寄る」と言う技巧に拠らない故に新奇な歌語を求め、歌語の工夫によった歌として捉えることもできるであろう。

以上のことから、「網代」の歌題を詠法の特徴として従来の縁語、掛詞である「水魚」や「寄る」の組み合わせとして用いながら、新奇な歌語によって新たな歌の世界を求めて詠じ、歌人ごとに詠作方法の工夫がなされていることが指摘できるであろう。

4

『堀河百首』の「網代」の詠歌において、類型的に用いられている歌語を挙げてみよう。「網代」の詠歌において「浪」が詠まれる例歌としては『万葉集』の人麻呂の歌(264)に「浪」が詠み入れられ、それ以来、数多くの例歌を挙げることができる。

264もののおややそ宇治川の網代木にいざよふ浪のゆくへしらずも波に関して歌語を入れることは「網代」の伝統的な詠歌方法の一つと言えるであろう。殊に、屏風歌において波と関連した歌語として

は「しら波」の例歌が数多く見出される。それは屏風絵の関連と推測が可能であろう。

『堀河百首』の「網代」の詠歌十六首のうち七首までが「浪」に関する歌語が詠まれ、伝統的な詠作方法を踏まえた詠歌と言える。『網代』の詠歌に「浪」を詠み入れたのは三首(1026・1036・1039)である。それ以外に波の種類としては枕詞としての「さざ浪」が一首(1026)あり、この詠歌には「浪」も読まれている。その他には「水波」(1037)「しら浪」(1038)「しき浪」(1040)が挙げられ、何れも『万葉集』に見出せる歌語である。そのうち、「しら波」以外はいずれも「堀河百首」成立以前に「網代」と共に詠まれた例歌を挙げることができぬ。「しら波」は歌語として『万葉集』から詠まれており、「網代」の詠歌においては「柿本集」に一首(214)みられる。また、屏風歌には数多くの例歌を挙げることができる。このように「網代」の詠歌において「しら波」は定着した歌語と捉えることができるだろう。

214あじろのしらなみよりてせかませばながれる水もの解けからまし

「しき浪」を歌語として詠み入れた歌は河内の歌(1040)である。

1040ひまもなくしき浪かくる網代木をひのよるとや人のみるらん
「しき浪」は『万葉集』より詠まれているが「しき浪」によって「網代」を詠じて例歌はなく、新しい歌語による詠歌といえるであろう。「しき浪」は「堀河百首」の他の歌題に二首の詠歌(279・1452)に見出すことができ、「堀河百首」詠出当時は詠まれていたことが判るであろう。

「水波」は『万葉集』からみられるが、「網代」に詠まれている

例歌は見当たらない。だが、「水波」を歌語として詠み入れた歌は、管見の範囲においては数少なく、『輔親集』（『私家集大成中古Ⅱ』11）に一首（128）、「橘為仲朝臣集」（『私家集大成中古Ⅱ』40）に一首（63）見い出せるのみである。

128 水波にひをはよせてやとまらまし見るにもあかぬうちや鳥は
63 水波に流れてくたるかはらけは花のかけにもくらざりけり

このように「水波」は歌語として例歌が少なく、「網代」を詠じた歌は見出せない。しかも、「水波」は例歌が少なく、漢詩文にみられることから、歌語の拡張の一つと言える。また、「水波」拠って「網代」を詠じた隆源の歌（1037）は特徴的な一首と捉えてよいであろう。このように、「網代」の歌に「浪」または「しら波」「しき浪」「水波」というような浪の種類を詠み込むという伝統的な詠出方法を踏まえながら歌語の拡張という工夫が捉えられるであろう。

『堀河百首』の「網代」の詠歌において、特徴的に歌語によって詠じている歌を挙げてみよう。既に、指摘されているように『堀河百首』の特徴としては『万葉集』に本歌を求めた泳法や古語、俗語を多く詠み込み斬新な表現や田家山村に取材を拡げているとされている。⁶堀河百首題「網代」において、田家山村の取材による歌語や大衆の生活を表す俗語等による詠歌として源頭仲の歌（1030）師時の歌（1033）藤原顕仲の歌（1034）が挙げられる。そのうち二首は

103 氷魚のよるたびにぞ払ふ田上やめぐらにかかるあじろ木の布
1034 ゆふだたみ田川川のあじろきのめぐらにひをもくらす比かな

であり、いずれも田上の網代木と「めぐら」が読み込まれている。「めぐら」は網代の見張りをする人が座るところであり、源頭仲の歌（1030）の「むらぎみ」と同様にいずれも、漁夫の生活感溢れる俗

語を用いている。「めぐら」は管見の範囲では詠み入れた例歌はなく、新奇な歌語の一つと言えるであろう。このような発想は『曾根好忠集』の歌（263）にみえ、俗語による詠作方法の影響と看取できよう。殊に「めぐら」を詠み入れたこの二首のうち藤原顕仲は既に指摘されているように、他の歌人の影響を受けやすいことからすると師時の歌から複数の歌語を取り入れたと考えられるであろう。そして、師時の歌（1033）においては「網代木の布」も例歌が見つからないことから新奇な歌語に違いないだろう。この「めぐら」と「網代木の布」を詠じた歌は『堀河百首』以後の「網代」の詠歌に見出せることから、これらの歌を基としたと考えられるであろう。また、『万葉集』を意識した詠歌として公実の歌（1025）が挙げられるは

1025 武士のとしよるをもしらぬかあなじろにひをやかぞへざるらん
この詠歌は『万葉集』の人麻呂の網代を詠んだ歌（266）の初句の「ものこのふの」を意識した歌と受け取れるであろう。また、匡房の歌（1026）もやはり初句「さざ浪」は二句目に「あふみの海」の枕詞であり、藤原顕仲の歌（1034）の初句「ゆふだたみ」も『万葉集』の詠歌を意識し、「田上」にかかる枕詞を詠み入れ、万葉を意識した詠作方法と指摘できるであろう。

5

以上のことから、「網代」が冬の歌題として定着するに当って影響を受けた屏風歌や障子歌が堀河百首題「網代」においても大きな役割を果たしていたことは明らかであろう。堀河百首題「網代」に

おいては詠作方法の特徴としては屏風歌や障子歌の影響がみられ、技巧や歌語も指摘できるであろう。

堀河百首題「網代」の詠作方法において、歌枕による技巧は『万葉集』以来見られ、殊に歌枕「田上」に拠った歌が集中したのは『堀河百首』の成立以後に歌枕としての定着がみられ、『堀河百首』の成立に重要な役割を果たした俊頼の影響ではないだろうか。また、『網代』の縁語、掛詞「水魚」「寄る」による詠歌は明らかに屏風歌や障子歌の技巧を基にし、それらに新たな要素を加え入れるという工夫に拠った詠歌が特徴として挙げられるだろう。

殊に、縁語「寄る」に「夜」を掛ける詠歌は元輔は元輔の屏風歌(93)の画趣からの影響からと受け取れ、また、「寄る」に「年寄る」を掛け、加齢の嘆き詠むと言う趣向は好忠の歌(263)の影響が関知でき、何れも比較的新しい詠作方法であろう。歌語の特徴としては俗語によって詠じられ、田家山村に取材した「むらぎみ」や「あぐら」「網代の布」のような俗語による詠歌が挙げられ、『万葉集』に詠まれている枕詞「ゆふだたみ」や「もののふの」「さざなみ」等の詠法の特徴が指摘できるだろう。

いずれも新しい発想や技巧は見出されないが屏風歌や障子歌の詠作方法を基として新しい展開を試みていることは確かであろう。それらが堀河百首題「網代」詠作方法の規範として定着する様相が看取できるであろう。

【注】

- (1) 橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究編』（笠間書院 昭五二）
 - (2) 家永香織氏『堀河百首』と屏風歌・初期定数歌（『国文学と国文学』四月号 平一〇・四）
 - (3) (1)に同じ。
 - (4) (2)に同じ。
 - (5) 神作光一著『曾根好忠集の校本・総索引』（笠間書院 昭四八）の校異によると236番の詠歌の二句目「川長」となっているのは群書類従本、伝為相筆本、桃園文庫蔵、尊経閣文庫蔵、高松宮家蔵等がある。
 - (6) 上野理氏『俊頼と堀河百首』（『文学・語学』42 昭四一・一二） 橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究編』（笠間書院 昭五二）
 - (7) 竹下豊氏『堀河百首』の成立事情とその一性格（『女子大文学 国文篇』第三六号 昭六〇・三）
- 本文に引用した『万葉集』『古今和歌六帖』『拾遺集』『蜻蛉日記』『堀河百首』『万代集』『柿本集』は、『新編国歌大観』（歌番号も同本による）による。ただし、表記については改めたところがある。

